

クレビヨン・フィス『夜とひととき』抄訳

鈴木 球子

キーワード：十八世紀 フランス文学 クレビヨン・フィス 貴族、リベルタン文学

1. クレビヨン・フィス著『夜とひととき』－解題－

クロード＝プロスペル・ジョリヨ・ド・クレビヨン (Claude-Prosper Jolyot de Cr billon)、通称クレビヨン・フィス (フィス (fils) は「息子」の意) は、1707 年 2 月 14 日にパリで生まれ、1777 年 4 月 12 日に同都市で亡くなった。彼の父親プロスペル・ジョリヨ・ド・クレビヨン (Prosper Jolyot de Cr billon) は、国王の図書係の地位を与えられるなど、当時名の知れた劇作家であった。ミシェル・ドゥロンの言葉を借りれば、彼は「コルネイユやラシーヌの後継者で、ヴォルテールのライバルとして紹介されていた¹。」彼はアカデミー・フランセーズの会員であり、1733 年には文芸書と歴史書の出版検閲官、1735 年には劇作品の検閲官に任じられている。父クレビヨンが手掛けたのは主に壮大な悲劇であり、『イドメネオ² (Idom n e)』(1705) や『エレクトラ ( lectre)』(1708)、1711 年に上演された『ラダミストとゼノビー (Rhadamiste et Z nobie)』などを、その代表作として挙げることはできる。

父親と比べると、クレビヨン・フィスの作品への評価は、当時からあまり芳しいものではなかった。父親が重々しい悲劇を創作したのに対して、彼はもっぱら短編や好色小説を好んで著した。クレビヨン・フィスが再評価され始めたのは、20 世紀も終わりに近づいた頃であった。彼の主な作品には、処女作の『シルフと R*** 夫人の夢 (Le Sylphe ou Songe de Madame de R***)』(1730)、『心と精神の迷い (Les  garements du c ur et de l'esprit)』(1736～1738)、『ソファ  (La Sopha)』(1742)、『夜とひととき (La Nuit et le Moment)』(1755) などがある。これらは今日、同時代のネルシアやルーヴェ、ドノンらの作品と並んで、リベルタン小説のさきがけと呼ばれている。

72 年間王位にあったルイ 14 世が、1715 年に死去したあと、オルレアン公フィリップ 2 世は王の遺言を破棄して³、ルイ 15 世の摂政の座についた。彼は帯剣貴族の支持を受け、フロンドの乱以来政治から遠ざけられていた貴族たちの復権に努めた。これに伴い、オルレアン公の摂政時代のフランスでは、貴族の社交界を土壌とする華やかな文化が一気に花開いた。風紀はこれまでにないほど自由化され、貴族たちの多くは摂政に倣って放埒な生活を送った。また、文学や哲学、絵画などの諸分野においても、それまでキリスト教的道徳が否定的に扱ってきた、人間の感覚や欲望に目が向けられ始めた⁴。リベルタン (libertin) やリベルティナージュ (libertinage) という言葉はこ

の時代、様々な意味を持つが、とりわけキリスト教に対する反発的態度と「快樂主義」の二つに深く関わるものを指す⁵。クレビヨン・フィスもまた、こうした思潮の中にあつて、貴族の男女の恋愛のかけひきを主題とする作品を著した。

クレビヨン・フィスの作品は、「恋愛小説」と呼ばれることもある。だが、「恋愛」という言葉は、近代的な男女間の愛情という意味では、この場合は用いられていない。植田祐次は「結婚、出産、家庭という概念は、ブルジョワ革命のあと、19世紀になってから生まれたものであり、労働、家庭、祖国という三位一体で現在に至る国家観や家族観が作られていく⁶」と述べているが、確かにクレビヨン・フィスの描く18世紀の貴族たちの恋愛は、結婚や家庭を目指すべき終着点とするものではない。あるいは、繰り返していることになるが、それは父クレビヨンが描いた悲哀に満ちた古典的な恋愛物語とも異なっている。本稿で扱う『夜とひととき』の中で、シダリズはクリタンドルを「放蕩者 (Libertin) ⁷!」と呼ぶ。彼らの対話は、放蕩者 (libertin/libertine) たちの駆け引きであり、欲望と好奇心、自尊心を闘わせ合う遊戯のようなものであり、「ひととき」の恋に過ぎないものを描き出している。

このようなかりそめの恋の軽さを、我々はむろん同時代人の様々な作品の中にも、同様に見出すことができる。モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ (Il dissoluto punito ; ossia il Don Giovanni)』(1787)の主人公は、婚約者のいる女性を誘惑する。小さなならずものであるシェリユバンは、『フィガロの結婚 (Les noces de Figaro)』(1784)において、女性たちを追いかけ回す。そして、ラクロの『危険な関係 (Les Liaisons dangereuses)』(1782)は、18世紀後半の貴族社会(社交界)を舞台に、悪党たち—メルトゥイユ夫人とヴァルモン子爵—の、頹廢的な愛と性の駆け引きを描き出す(クレビヨン・フィスの『心と精神の迷い』に登場する、若きメルクールの師である色男ヴェルサックは、このヴァルモン子爵の前身とも言われることがある)。だが、時代は大革命、そしてブルジョワ社会の成立に向かって進み、貴族たちのこうした放埒さは、次第に否定的に語られるようになっていった。

1755年に著された『夜とひととき (La Nuit et le Moment)』は、20世紀後半になって評価が高まった、クレビヨン・フィスの作品の一つである。物語は彼の大半の作品と同じように、戯曲を思わせる対話体で構成されており、登場人物たちの行動はト書の形で説明される。色男クリタンドルはシダリズの部屋を訪れる。彼は彼女を誘惑し、性急にことを運ぼうとするが、女性は彼に礼儀正しさを要求し、交渉は段階的に進められる。言い換えれば、この作品は欲望と抵抗の駆け引き、つまり問答めいた恋愛遊戯の展開を、この上なくじっくりと読者に味わわせてくれるものとなっている。『夜とひととき』は、1978年にニナ・コンパネ⁸の演出により、舞台化された。また、1994年には、*The night and the moment* という英語のタイトル(邦題は『欲望の華』)で、アメリカで映画化もされている⁹。

舞台はシダリズの田舎の邸である。デュクロが『***伯爵の告白 (Les Confessions du comte de ***)』(1741)の中で「一般に、特に『別宅 (petites maisons)』と呼ばれるこうした私邸を使いだしたのは、節度を守り、秘密を守って会うことを余儀なくされ

る愛人関係にあった人々や、放蕩のパーティーを危険な公邸で開くのを恐れ、また自宅で行うのは恥ずかしく思い、そのための隠れ家を持ちたいと考えた人々である¹⁰」と述べているように、当時、貴族の別宅はしばしば秘密の逢引のための隠れ家となった。男女が4人ずつ、この邸に泊っている。クリタンドルはシダリズの部屋へと入っていく。彼が朝まで出てこないであろうことは、明らかである。問題はそうした最終的な結末ではなく、そこへいたる過程であり、二人の間に繰り広げられる言葉のやりとりである。二人の会話が進むにつれ、同じ邸に泊っている別の男女が、それぞれ彼らの元の恋人であることを、読者は理解する。二人は互いに相手に対して優位に立ち上がり、相手の過去の恋人の例を引きあいに出して、言葉を武器にした攻撃をしかけあう。「私はあなたがエラスト君に会うのを邪魔していないのでしょうか¹¹？」「アラマント様に対しては、あなたは.....¹²」。シダリズは男性のこれまでの女性経験を、執拗なほど知りたがっている。クリタンドルは時に、相手のいうことを肯定するようには思えるが、その直後に「しかし」と付け加えて論を反転させる。彼は多くの女性関係を持つが、そのお相手たちは皆シダリズの知人である。情事が行われるのは、必ずしも室内ではなく、茂みがそれを覆い隠すこともある。そこに真剣さは存在しないか、あっても一時のものに過ぎない。恋愛の重々しさ、悲愴さはどこにもない。そしてシダリズもこの「ひととき」が終われば、クリタンドルの女性遍歴の一つに数えられるだけなのかもしれない。

我々にとっては風変わりな（当世風の表現をあえて用いるならば「不謹慎な」と言われるかもしれない）18世紀のリベルタン小説を読むことは、我々の社会を支えている諸観念—道徳観、国家観や家族観—が絶対的なものではないこと、言い換えれば歴史的なものであることを、思い出させてくれる。近代革命が、貴族文化の否定の上に成り立っているのならば、ブルジョワ社会の本質とはいったいどのようなものなのだろうか？

『夜とひととき』の邦訳は、大木登志夫により、昭和24年（1950年）に世界文学社から刊行されている。だが、現在この本は絶版で、非常に入手困難な状況にあるといっている。本稿はJ. H. Schneiderから1756年に出された版を底本とし、紙数の制限により、冒頭部分のみを新たに翻訳し、紹介しようと試みたものである。訳出は今後とも継続される予定である。

2. 『夜とひととき』抄訳

対話

（場面は田舎、シダリズの邸である。シダリズは部屋着を着たクリタンドルが入って来るのを見て、）

シダリズ：あらまあ、クリタンドルさま、なんと、あなたでしたの！

クリタンドル：マダム、お驚きになっては、こちらが驚きますよ。私があなたのご機

嫌を伺いに参りますことに、慣れていらっしやると思っておりました。こうしてお訪ねするのを、さも特別であると思われるのは、解せないことです。

シダリズ：それには少々わけがありまして、あなたが今日どなたかとお過ごしになりたいのだとしても、それはわたくしとではないでしょうと思っておりました。そんな風に考えていましたら、あなたが現れて、わたくしを驚かせたのですわ。

クリタンドル：もったいぶらずにいえば、それだけのことなのでしょうか？ 驚かせたというより、私はあなたを困らせているのではありませんか？ 厳密なところ、少なくともそうではないかと思うのですが。

シダリズ：あなたには珍しいお考えですわ。なぜそのようにお考えなのか、伺ってもよろしいでしょうか？

クリタンドル：あなたに隠し事をするつもりはまったくありませんが、私が今宵あなたのお部屋に伺ったことを、なぜそれほど驚かれたのかということも話していただけませんか？ これまでに何回もお目にかかった時には、あれほどなんでもないことでしたのに。

シダリズ：暇つぶしで来られていた時は、そう思っていたのですわ。でも、今日のあなたは、これまで時折そう見えたように、お暇だとは思われませんわ。

クリタンドル：私もあなたについて同じように思っております。そんなわけで、あなたが私の訪れを少々無礼だと思われることが幾分か心配でした。

シダリズ：少々無礼ですって！ あなたの言葉のお上手さと、こう申し上げるのをお許してくださいね、そのお考えの突飛なことに感嘆いたします。でも、なぜ今日は私にそんなに迷惑をかけるとお思いなのか、おっしゃって下さいませんか？

クリタンドル：ええ、なぜ私がここにいることが、あなたをそんなに驚かせるのか、先に教えて下さる気になればですが。

シダリズ：すぐにご満足なさいますわ。

（彼女は衣裳部屋へ行き、戻って来る。肌着を取り替えており、靴も脱いでいる。）

クリタンドル：おお、なんというおみ足です！

シダリズ：まあ、やめて下さいませ、ムッシュウ。称賛して下さっても、あなたの向こう見ずなことを、忘れはいたしませんよ。

クリタンドル：あなたのおみ足を称えるのが、最初かどうかは覚えておりませんが、確実なのは、それに見とれるのは初めてではないということです。

シダリズ：あちらにおかけになって。でなければ、お引き取りください。

クリタンドル：奇妙な扱いをされるのですね。でも、従いましょう。

（彼女は横になり、小間使い女の一人に残るように言う。クリタンドルは寝台の傍ら

の肘掛椅子に腰をかける。)

シダリズ：なんとまあ、本当に、クリタンドルさま、どなたともお約束はございませんの？

クリタンドル：なんと、本当に、私はあなたがエラスト君とお会いする邪魔をしてはいませんか？

シダリズ：エラストさまですって！ 本当は、そんなことはお考えではないのでしょうか、おかawaiiそうな伯爵さま。

クリタンドル：誓いますよ。美しい侯爵夫人。あなたがエラスト君を気にかけていないように、あなたのお宅にいるどのご婦人のことも考えてはおりませんとね。

シダリズ：何ですって！ アラマントさまのこともですか？

クリタンドル：アラマントさん！ ええ、むろんです。おもしろい御冗談ですね。あなたが意地悪くも彼女にお宅に来るようお頼みになったので、私が彼女のお相手をしなくてはならないとお思いなのではないでしょうか？

シダリズ：まったく、いたずらはお終いですわ！ 彼女がここにいるわけをあなたはご存じないと、わたくしに信じさせたいということですか？

クリタンドル：なんと！ 失礼ですが、彼女が期待していることについては、見当がついていますよ。分かって下さい。彼女がここに居ることについて、私は苦痛を感じているのですから。あなたのことは、理解できませんよ。あのような女¹³を背負いこんだりして、間違いなく、人が来なくなるのを心配しなければいけませんね。

シダリズ：本当に、クリタンドルさま、それは余計なご裁量ですわ。そうでなければ、おかしな皮肉¹⁴というものです。セリメーヌさまを招いて、あなたに悪さをしたのもわたくしだし、ベリーズさまやリュサンドさま、ジュリーさまが同時にわたくしの家にいらっしゃっているのもまた、わたくしの落ち度だとお思いになることなのでしょうね。

クリタンドル：いや、彼女たちのためには、お宅にはクレオン君やオロント君、ヴァレール君がいるのではないですか？ あなたは、彼女たちは私目当てでいるのだとお考えでしたが。

シダリズ：いったい、彼女たちがわたくしの面目を保たせてくださったことに、あなたが一枚かんでいるなんて思っていないせんわ。あなたがどれほどそう主張なさってもね。

クリタンドル：なんて馬鹿げたことを！ 私がこちらへ来ましたのは一週間以上前です。男性陣が来たのは一昨日ですし、女性たちは今日です。こうした順を見れば、彼女たちが私のために来たのだととがめることも、あなたのためだけに来たのだと得意になることも、もはやおできにはならないでしょう。

シダリズ：わたくしがそんなことに得意になるほどお馬鹿さんだと、よもや思いではないでしょうに。

クリタンドル：思うに、ヴァレール君やエラスト君、クレオン君について愚痴をこぼされるのも、間違っているでしょう。彼らは彼女たちより二日前に到着して待っていたんですから。彼らはきちんとしています。すべての人にたいしてそういうわけではないと確信していますけれどね。

シダリズ：殿方のお振舞はまったくお上品だと感じていますわ。でも、クリタンドルさま、女の方々が求めていらっしゃるのがあなたではないというのは、本当ですか？

クリタンドル：彼女たちが何をしているか、お分かりでしょう。

シダリズ：彼女たちが何をしたがっているか、わたくしに分かりましょうか？

クリタンドル：ああ、マダム、こんなことを申し上げるのをお許しいただきたいのですが、あのご婦人たちのように考える女性について、同じ意見は持てませんね。

シダリズ：クリタンドルさま、本当におかしくおなりですこと。そのことであなたを責めたりしませんけれども。というのも、あなたはそんなつもりではないと思っていますもの。でも、わたくしはエラスト様が、あんなにすばらしいはずだった夕食を台無しにしに來られたことを決して許せませんわ。

クリタンドル：あなたが彼を邪魔者扱いされるのは、おかしくはないように思えます。ですが、正直なところ、なぜだか分かりませんね。例え彼がいなかったとしても、あの夕食はあなたにとって、それほど快適だったのでしょうか？

シダリズ：何ですって？ 四人のかつての女性の方々、彼女たちはおそらく未だに、あなたは自分のものだと言っているのでしょう。あなたが彼女たちに囲まれてお困りの様子は、わたくしにとって面白いことだったろうとは、思いませんの？

クリタンドル：彼女たちの誰もものにしなかったとあなたに言い張るのも馬鹿げたことでしょう。しかし、全員をものにしたというのも、厚かましすぎるでしょう。だいたい、彼女たちが私に幾分好意を寄せてくれているとしても、それがなんだというのですか、彼女たちにとっても、私にとっても？ この世でしなければならないことがあって、偶然や気紛れ、様々な事情によってしばし結びついた人達に、大して興味もないことをなぜ覚えていて欲しいがるのですか？ それに、これは本当のことですが、少し前に私はある女性と夕食をとっていて、どうしても彼女が思い出せなかったのです。私たちがかつて大層優しく愛し合ったことを彼女が思い出させてくれなかったら、知らない人として、別れてしまったことでしょう。

シダリズ：彼女があなたを覚えていたことに、驚いていますわ。こうした色恋沙汰は、わたくしたちのほうで殿方より忘れっぽいと言われていましたわ。

クリタンドル：それについては、あなたは責められますね。でも、この点に関しては、記憶の喪失は男女共に同じと思っていましたよ。

シダリズ：ですけど、殿方より女の方が、もっと卓越しているのですわ。

クリタンドル：憶測は抜きにして、それはあなたが犠牲にしなければならないものの大小に拠るはずだと思っています。思いもよらないことですが、女性が我々ほど犠牲を払っていないということでしたら、何についてのことか分かりませんが、あるいくつかの事柄を我々よりは覚えていてもらいたいですね。しかし、お互いに少々親密に暮らした二人が、その関係がどんなに短くても、抱いた感情がどれほど薄くても、そのことをほとんど覚えていないなんて、おそらく想像するに普通ではありませんよ。とはいえ、同時に、こうしたことをすっかり忘れるのは、まったく例がないことではないと思います。

シダリズ：わたくしとしては、そんなことは可能ではないと思いたいですわ。あなたはセリメーヌさまのことを覚えていらっしゃるでしょう？

クリタンドル：それは、まったく違いますよ。私たちの関係は長続きしました。それに私は彼女を大層愛したものですから、この点、彼女を忘れることはできませんでした。

シダリズ：あなたが本当のことをおっしゃっているのなら、あの方は幸せですわ。

クリタンドル：それはどうですか。というのも、私が覚えているのは、口にできることを越えていて、彼女を軽蔑するようなことだけだからです。

シダリズ：冷酷なこと！ でも、わたくしはあの方に代わって、あなたにお話ししなければなりません。

クリタンドル：彼女に代わって！ 私に！ あの女のことで、私は何にも驚きませんよ。

シダリズ：あなたがあの方をこの上なくひどく不当に扱われ、いうことを聞かないで頑なに非難をすると、彼女は主張していますわ。

クリタンドル：あなたは私の経歴を、私と同じくらいご存じでしょう、マダム。それで、あなたは私にいかなる非をも認めていらっしゃらないのですから、彼女が私のせいにしても、私がほとんど動じないとお考えでしょう。あなたが彼女をどのくらい知っているか知っていながら、彼女があなたに弁護してくれるようにお頼みしたことに、私は驚かざるを得ません。エラスト君が私の前で、あなたにこの上なく卑劣な振る舞いをしたのに、私に取り成しを頼んだのでなかったとしても、ですよ。

シダリズ：本気で、彼はあなたに弁護を頼んだのですか、クリタンドルさま？

クリタンドル：ええ、マダム。もしあなたがお聞きになっていたら、きっとお喜びになったくらい、熱烈にね。

シダリズ：まあ、ひどく喜ぶんですって！ 間違いないですわね。おそらく、決裂の罪を全部、あの方はわたくしに押し付けるのでしょうか？

クリタンドル：その罪の幾分かを、彼があなたに押し付けるのはもっともな事です。しかし、彼自身がしたことは別として、この件に関して、私は彼がかなり穩健であると思っていますよ。ためらうことなく身を任せられるように、

慎み深さの名のもとに隠れるという性質を除けば、あなたは親切な女性で、節操をきちんと備えていると言っていましたよ。

シダリズ：無礼な人！ わたくしは、あの人についてそんなことは間違いなく言いませんわ。ですけど、あなたは、あの方がここに腰を落ち着けに来た時の、軽薄な雰囲気には唖然とされませんでした？

クリタンドル：確かに、彼の登場には驚かされました。ですが、あなたが彼を悪くはおとりにならないと確信せずに、彼がここに来たと言っているのではありませんよ。これは、あなたのような女性に対して我々が負っている、ささやかな配慮ですよ。

シダリズ：告白しますわ。信じてくださいませ。わたくしの出発の七日か八日前に、おかawaii伯爵夫人¹⁵のお宅であの方とお夜食を頂いていました。こちらでのわたくしの滞在予定が話題になりました。あの方は厚かましくも、わたくしの機嫌伺いに来るつもりだと言ったのですわ。あの方があのおかawaiiそうなかawaii夫人を狙っていて、今まで彼女があの方の気持ちを理解していないことを知っていますから、彼女に決心させるために、あの方に嫉妬させようとしたり、わたくしに彼女を脅かすだけの理由があると思わせようとしたりしているのだと思っていました。でも、わたくしは彼の丁重さを冷たく受け取っていたんですの。告白しますとわたくしは、彼が誰よりも歓迎されない場所へは来ないでしょうと期待していたんです。あの方が到着されたのを見た時の驚きといたら、ありませんでしたわ。あなたがアラメントさまにしたように、扱ってあげましたわ。セリメーヌ様に対するより、アラメントさまに対して、そうしたいと思っているように見えましたわ。

クリタンドル：誓いますよ！ 私が疑っているように、あなたがアラメントさんと呼ばれたのは、何らかの心地良い光景を得たかったからなのだとしたら、それに成功されたし、夜食も素晴らしく陽気なものだったのだと言わなければなりませんね。

シダリズ：これほどに困ったり、辛かったりした日があったとは思われませんわ。いろいろと要求してあなたを悩ませている二人の女性の間に（というのも、少なくとも二人はあなたに対して積極的だったことを、認めざるをえないでしょうから）、あなたは挟まれていました。わたくしは、エラスト様の正面にいて、あの方の要求や視線、お話に、言い表せないほどいらいらさせられていました。いえ！ 本当よ！ 退屈したのと憤慨したのとで死ぬかと思いましたわ！

クリタンドル：もっと些細なことで、我々は毎日のように死ぬんでしょ。で、誓って言いますが、私もあなたと同じで、気楽だったわけではありませんよ。

シダリズ：セリメーヌ様への冷淡さには、驚きませんでしたけれど、アラメント様に対しては、あなたは.....。

クリタンドル：私が！ アラメントさんをものにするんですって！ これは、とんで

もなくひどい中傷ですね！

シダリズ：まあ！ わたくしにそんなにお怒りにならないでくださいな！ 「世間」があなたに彼女を差し出したからといって、それはわたくしのせいでしょうか？

クリタンドル：「世間」ですって！ 「世間」なら、お許しを得て、このように私に彼女を差し出すよりは、守った方がいいでしょうね。「世間」というのは、相変わらず馬鹿げていますよ。

シダリズ：クリタンドルさま！ あなたは誠実ではありませんわね！

クリタンドル（大層低い声で）：もしそんな調子で話し続けられるなら、聞き取るのは難しいですね。

シダリズ：御酔狂を！ いったいその謎めいた雰囲気は、どういうわけですか？

クリタンドル（相変わらず低い声で）：ねえ！ ジュスティーヌは？

シダリズ：あら、彼女が何をすると？

クリタンドル：いや、何もしませんよ。彼女を信用すると決めていないのと、あの娘があなたの部屋に留まっていたは、ある事柄について私の考えを自由に説明できないと言うだけです。

シダリズ：今日、なぜあなたがあの娘を追い払おうとするのか、分かりませんわ。このところ毎日、彼女があなたの邪魔をしたことなどありませんわ。

クリタンドル：そうかもしれません。ですが、あなたのように考えてみても、同じことは言えませんね。お好きなようになさってください。でも、私たちだけになりたいと思ってくださったら、その方がいいと思われませんが。

シダリズ：奇妙なお考えですわね！ ジュスティーヌは大層信頼できる娘ですわ。

クリタンドル：彼女の口の堅さをけなしはしませんし、あなたの秘密が彼女の手の間で守られてないとは思いません。ですが、私が自分の秘密を、あなたの手のうちにだけ明かしたいと願うのを、奇妙だと思いいにならないで下さい。

シダリズ：彼女は眠っていて、あなたのいうことをきくと聞いていませんわ。

クリタンドル：眠っているふりして、話を聞くことはできます。マダム、あの娘が眠っていようと、眠っていまいが、彼女がいると不安ですし、邪魔なんです。お訪ねのことに對して、私が黙っていることをお認めになるか、さもなければ、私たちだけになることに同意してください。

シダリズ：わたくしたちだけですって！ でも、なぜですか？ 本当に！ おかしいですわ！ いいえ、どんなに考えても、それには同意いたしません。

クリタンドル：お好きなように。しかし、でも、こんな単純なことをあなたが嫌がるとは、理解に苦しみます。あなたにとっては大したことはないですが、私には必要なことなんです。

シダリズ（棘のある口調で）：まったく、では、お好みのようにしなくてはなりませんのね。いったい本当に、わたくしに配慮をほとんどしてくれませんのね。ジュスティーヌ、ジュスティーヌ！ あら、あの子、眠っていませんでしたわ。ジュスティーヌ、あなた寝ていいわよ。

ジュスティーヌ：奥さまは、明日は何時に来ることをお望みですか？

シダリズ（当惑して）：まったく、おかしい質問ね！　いつもの時間よ、たぶん。

ジュスティーヌ：奥さまがベルを鳴らすのを、お待ちいたします。

（ジュスティーヌは出ていく。）

シダリズ：さて、ムッシュウ、あの娘のことを聞きましたでしょう！　可愛いことを言いましたわ。ほら、で、何かについて説明してくださるのでしょうか！

クリタンドル：まあ、マダム、私のところへおかけください。

シダリズ：あなたが、わたくしのところにおかけになって、ムッシュウ。ひどくわたくしたちの邪魔をしてしまったとの強い確信なしで、あの娘がわたくしの部屋を出ていったと本気で思いますこと？　わたくしたちが結託していて、あなたもわたくしも考えもしなかった、明らかに偶然の産物でしかないことなのに、ちゃんと決まっていた逢引だと思っているのですわ。

クリタンドル：あのジュスティーヌは、頭がよくないんですよ！

シダリズ（少々つつけんどんな口調で）：彼女のような種類¹⁶の人たちと、同じ頭を持っているのですわ。それで十分ではありませんか？　あなたご自身だって、もしここに泊っていらっしゃる殿方のお一人が、わたくしの部屋で一夜の大半を過ごされたと聞かれたら、なんとお考えですか？　わたくしにお話をするためだけにそれだけかかったと、ご親切に思ってくださいますの？

クリタンドル：ある特別な理由のために、確かにあなたを信じるでしょうよ。ところで、ジュスティーヌはあなたの腹心ですし、あなたと私の間に何もないことを知っていますから、私のように、この件について考えるはずがありませんよ。ああ、彼女が私のことを、もっとも幸せな男だと思ってくれたら。そして、彼女がそう思ってくれるのと同じくらい、私が幸せな男であったなら！

シダリズ：あの娘がいないと、とても艶っぽくおなりですね！

クリタンドル：いいえ、彼女がいなくて、もっと自由になったという、簡単なことですよ。もし彼女がいなくなったことで、私が何も得ないのでしたら、なぜ彼女を出ていかせたのでしょうか？

シダリズ（とても真面目な口調とやや驚いた雰囲気）：少なくとも、ムッシュウ……。

クリタンドル：おお、マダム。私をご存じでしょう。あなたに敬意を欠いて、何を得られるというのでしょうか？　私があなたにお願いできることに何ひとつ同意してくださらないので。あるいはもし何かをしようとしたら、あなたを傷つけてしまうでしょうに。

シダリズ：クリタンドルさま、ではアラマントさんを本当はお好きではないのですね。

（クリタンドルは肩をそびやかす。）でも、彼女をくどかれたのででしょうに。

クリタンドル：ああ、それは別です。

シダリズ：本当は、今では大違い、ということでしょう。

クリタンドル：さらに言えば、違いが生まれたのは、今日の事ではないと思っています。

シダリズ：驚きますわ。それは近代哲学が有する責務ではないかと思っていました。

クリタンドル：これにおいては、他の多くのことにおけるのと同様に、近代哲学は私たちの思考を正したのだと思います。しかし、それは私たちの思考を決定づけたというよりは、私たちの行動の動機を知り、たまたま行動するのだと思わないように学ばせたのですよ。例えば、私たちがこれほどしっかり思考するようになる前に、私たちは今やっていることの全てを間違いなくやっていたのです。とはいえ、私たちは勢いに駆られて、原因も知らず、偏見がもたらすあの臆病さでもって、それをやっていたのです。私たちは今日同様に、尊敬するに足るものではありませんでしたが、そう見えるように望んではいました。馬鹿げた主張をして、楽しみをひどく妨げるということは、なかったのです。結局、私たちは幸いにも、真実に到達しましたが、ああ！ 何の結果も私たちにはもたらされなかったのでしょうか？ ご婦人方は社交界でしかめ面をし、男たちは美德を好んでいたんです。好きになれば、結ばれます、お互い退屈するでしょうって？ 結ばれたのと同様、気楽に別れますよ。また好きになりますかって？ 始めてくつつきあったかのように、激しくまた結ばれますよ（略）。

¹ Michel Delon, *Le savoir-vivre libertin*, Hachette, 2002, p.45.

² フェヌロンの『テレマクの冒険』は、18世紀に人々に愛読された作品の一つであった。そこに含まれるイドメネオの誓願と犠牲の話は、イドメネオを題材とする劇作品を同時代に多く生み出させることになった。

³ ルイ14世は自分の死後、モンテスパン侯爵夫人との間に生まれたメヌ公ルイ・オーギュストとトゥールーズ伯に、摂政政府での重要な役割を与える予定であった。しかし、オルレアン公は王の死後、その遺言を無効化させ、摂政として実権を握った。彼は自分を支持したパリ高等法院に、国王への建言権を与えた。このことが、貴族たちが王権に抵抗するきっかけを生み出した。

⁴ 参照、拙稿「フィガロ三部作 考察—シェリュバンの死とともに失われたもの—」『信州大学総合人間科学研究』第12号、2018, pp.52~66.

⁵ 参照、拙著『サドのエクリチュールと哲学、そして身体』、水声社、2016, pp.44~45.

⁶ 植田祐次『フランス女性の世紀 啓蒙と革命を通して見た第二の性』、世界思想社、2008, p.17.

⁷ Claude-Prosper Jolyot de Cr billon, *La Nuit et le Moment*, J. H. Scheneider, 1756, p.60.

⁸ ニナ・コンパネ (Nina Companeez) (1937~2015)。フランスの映画監督で脚本家、劇作家。主作に『夏の日』のフォステューヌ (*Faustine et le bel  t *) (1971) など。

⁹ アンナ・マリア・タトー (Anna Maria Tat ) (1949~) 監督作品。主演、レナ・オリン、ウィレム・デフォー。

¹⁰ Duclos, *Les Confessions du comte de **** (1741), Desjonqu res, 1992, p.79.

¹¹ Claude-Prosper Jolyot de Cr billon, *La Nuit et le Moment*, op.cit. p.6.

¹² *Ibid.*, p.18.

¹³ クレビヨンはこちらで、当時の流行語である「手合い (*esp ce*)」をイタリック体で強調して用いている。

¹⁴ この「皮肉 (*persiflage*)」という語も、作者の手によってイタリック体で強調されている。

¹⁵ シダリズは「petite」という語を、伯爵夫人を表すのに用いており、やや皮肉を込めた感じがうかがえる。Cf. « Notes », « 9 », Cr billon, *La Nuit et le Moment*, *Le Hasard du coin du feu*,  dition

établie par Jean Dagen, GF-Flammarion, 1993, p.218.

¹⁶ ここでも、イタリック体で強調されてはいないものの、「*espèce*」が用いられている。

参考文献

1. 橋本克己「恋愛遊戯のモラリスト」『フランス女性の世紀－啓蒙と革命を通してみた第二の性』、世界思想社、2008年、pp.16～26.
2. 鷺見洋一「解説」『フランス幻想文学傑作集、非合理世界への出発』、白水社、1982年、pp.19～20.
3. Michel Delon, *Le principe de délicatesse*, Albin Michel, 2011.
4. *Crébillon, La Nuit et le Moment, Le Hasard du coin du feu*, édition établie par Jean Dagen, GF-Flammarion, 1993.

(信州大学 全学教育機構 助教)

2018年1月22日受理 2018年3月5日 採録決定